



京大広報

No. 537

1999. 7



国際交流会館おうばく分館 関連記事本文724ページ

目次

大学の動き

長尾総長の大韓民国訪問	722
博士学位授与式	722
創立記念式の挙行	722
外国人留学生歓迎パーティー	723
シンガポール国立大学及びイリノイ大学 アーバナ・シャンペーン校との学術交流 ...	724
国際交流会館おうばく分館開所式	724
人権に関する研修会の開催	725
部局の動き	
教育学部創立50周年記念式典・記念 講演・記念パーティー	725
日誌	726
紹介	
大型計算機センターのスーパーコンピュータ ...	726
工学研究科附属量子理工学研究実験センター ...	728

文化交流

「オーストラリアの首都はどこ？」長崎百伸 ...	729
保健コーナー	
「働き盛りの突然死」	730
随想	
「現場離れ、自然離れの傾向を憂う」 名誉教授 重永昌二...	731

公開講座

- 終了報告 -	
教育学研究科附属臨床教育実践研究センター 公開講座「テレビの機能と魂の窮境」 ...	732

話題

クラブ紹介 - 水泳部 -	732
お知らせ	
「白馬山の家」の夏季開設	733
「白浜海の家」の利用	734
「総合体育館附設プール」の夏季利用	734

大学の動き

長尾総長の大韓民国訪問

長尾 真総長は、5月26日から29日まで大韓民国に出張した。

今回の出張では、本学との「学術交流に関する一般的覚書」交換校である慶北大学校を訪問し、同大

学校53周年記念式典に出席するとともに、記念シンポジウムにて「Universities in Transition and Our Possibilities」のテーマで、基調講演を行った。

博士学位授与式

5月24日（月）午前10時30分から、京大会館において、長尾 真総長、三好郁朗副学長をはじめ、各研究科長、事務局長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（平成11年5月24日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時15分終了した。

今回の学位授与者は、課程博士34人、論文博士33人の計67人であった。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研究科	課程博士	論文博士	合計
法学研究科	1		1
経済学研究科	1	3	4
理学研究科	8	4	12
医学研究科	7	6	13
薬学研究科		4	4
工学研究科	6	5	11
農学研究科	10	10	20
人間・環境学研究科	1		1
エネルギー科学研究科		1	1

創立記念式の挙行

6月18日（金）本学創立102周年記念式が、元総長、名誉教授、各部局長等関係者多数の出席を得て、本学総合体育館において挙行された。

式は午前10時に始まり、総長式辞、永年勤続者の表彰、永年勤続者代表の答辞があり、午前10時25分終了した。

本年表彰された方は、30年勤続者88人、20年勤続者47人の計135人であった。

お名前は6月18日の学報第4709号に掲載されている。



外国人留学生歓迎パーティー

平成11年度入学の外国人留学生歓迎パーティーが、6月1日(火)午後6時から京大会館において長尾 真総長, 指導教官等約230人が出席して盛大に行われた。

パーティーは, 総長の挨拶, 新入留学生で文学部研究生カリーナ・ロートさんのスピーチ, 三好郁朗副学長の乾杯で始まり終始なごやかな雰囲気のうち午後7時30分に閉会した。

なお, 5月1日現在の国(地域)別留学生数は次のとおりである。



地域	区分 国名等	学部		大学院			研究生等	計
		学生	聴講生	修士課程	博士課程	聴講生		
ア ジ ア 州 (23)	インド				3		6	9
	韓国	5	4	31	83		47	170
	スリランカ			1				1
	台湾	1		25	27		19	72
	中国	64		88	153		106	411
	ネパール	1		2	2			5
	パキスタン				4			4
	バングラディシュ				10		3	13
	香港		1		3			4
	モンゴル	4		1	2		1	8
	インドネシア	6		8	21		5	40
	カンボジア	4		2				6
	シンガポール	8	1	1	2		1	13
	タイ	3		11	21		1	36
	フィリピン	6		1	4		2	13
	ベトナム	3		3	2		2	10
	マレーシア	4		3	7		3	17
	ミャンマー			2			4	6
	イスラエル				1		1	2
	イラン	1		1	1		1	4
	サウジアラビア				1			1
	トルコ	1			5			6
	ヨルダン			1	1			2
大洋州 (2)	オーストラリア	3	2	2	3		1	11
	ニュージーランド	3	1		1			5
ア フ リ カ 州 (14)	アルジェリア					1	1	1
	エジプト				3	1	2	6
	エチオピア			1	1			2
	ガーナ				2			2
	ケニア			1	2			3
	コートジボアール				2			2
	スーダン				1			1
	タンザニア			1	3		3	7
	チュニジア			1	1			2
	マダガスカル				1			1
	マラウイ			1				1
	マリ				1			1
	南アフリカ				1		1	2
	モロッコ	3		1				4

地域	区分 国名等	学部		大学院			研究生等	計
		学生	聴講生	修士課程	博士課程	聴講生		
ヨ ー ロ ッ パ 州 (19)	イギリス		1	3	1		3	8
	イタリア		1	1	2		2	6
	オーストリア		1	1	3		1	6
	オランダ				1		1	2
	ギリシア					1		1
	スイス		1				4	5
	スウェーデン		1			1	1	3
	スペイン				1	1	2	4
	ドイツ					6	9	15
	フランス		1	1	2		5	9
	ベルギー				1	1		2
	クロアチア						1	1
	スロバキア						2	2
	チェコ					1		1
	ハンガリー	1				2	3	6
	ブルガリア				1	1		2
	ポーランド				1	1	1	3
	ルーマニア	2			2	1	1	6
	ユーゴスラビア						1	1
N I S 諸 国 (4)	ウクライナ				2	1	3	
	ウズベキスタン					1	1	
	カザフスタン			1	1		2	
	ロシア				3	3	6	
北 ア メ リ カ 州 (5)	アメリカ		6	5	9		11	31
	カナダ	1	1	4	1		1	8
	キューバ						1	1
	ドミニカ			1				1
	メキシコ			1	2		1	4
南 ア メ リ カ 州 (6)	アルゼンチン	1		2				3
	コロンビア			1	2			3
	パラグアイ				1			1
	ブラジル			3	4		7	14
	ベネズエラ			2	1			3
	ペルー			1	1			2
計(73)		125	22	222	427	1	273	1,070

シンガポール国立大学及びイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校との学術交流

本学とシンガポール共和国のシンガポール国立大学及びアメリカ合衆国のイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、このたび本学と両大学との間で「学術交流に関する一般的覚書」を交換することとなった。

シンガポール国立大学との「覚書」は、本学長尾真総長及びシンガポール国立大学リン・ピン副学長の署名により、平成11年5月15日に交換された。

同大学は、1980年、シンガポール大学とナンヤン大学の統合により創立された国立大学であり、建築学、経営学、工学、人文科学、社会科学、歯学、法学、医学及び理学の学部を有する総合大学である。同大学の教員数は約1,600人、学生数は約26,900人である。

また、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校との「覚書」は、平成11年5月19日に本学において、長尾真総長及びイリノイ大学アーバナ・シャン



エイケン学長と長尾総長の「覚書」交換

ペーン校マイケル・エイケン学長が署名し、交換された。

同校は、1867年創立の公立大学であり、農学、生命科学、経営学、通信学、教育学、工学、人文科学、社会科学、法学、獣医学、芸術等の学部を有する総合大学である。同校の教員数は約2,100人、学生数は約36,100人である。

国際交流会館おうばく分館開所式

国際交流会館おうばく分館が、宇治市五ヶ庄に完成し、開所式が5月20日(木)に三好郁朗副学長はじめ多くの学内外関係者の出席を得て行われた。

式は、午後2時に始まり、まず三好副学長より、おうばく分館の建設に尽力を頂いた関係者への謝辞が述べられるとともに、国境を越えた学問交流の重要性と宿舍確保の必要性が強調された。

続いて、神保道夫国際交流会館委員会委員長より、留学生と地元市民とのおうばく分館における交流について期待が述べられた。

引き続き、施設見学の後、会場を木質科学研究所木質ホールに移して、祝賀会が催された。祝賀会は、瀬地山敏国際教育プログラム委員会委員長の挨拶、黒川征事務局長発声の乾杯で始まり、おうばく分館に入居したばかりの留学生の自己紹介等を交え、終始なごやかな歓談が続き、盛会のうちに閉会した。

おうばく分館は、増加の一途をたどる外国人留学生及び研究者の宿舍の確保のため、本学の国際交流会館として、1982年に建設された修学院本館(宿

室133室)、1987年に建設された宇治分館(同26室)に続き建設されたもので、本年3月に第1期工事が竣工(同44室)し、このほど学内外関係者に披露されたものである。

完成した建物は、鉄筋コンクリート造5階建て延床面積1,032㎡の単身棟(留学生用30室、研究者用4室)及び同4階建て延床面積516㎡の家族・夫婦棟(留学生用家族室4室、同夫婦室6室)で、単身棟には宿泊施設のほか、管理施設、談話コーナー及びコインランドリー室が設けられている。

また、宿泊室には、冷暖房設備と給湯設備のほか電話、調理台、冷蔵庫、クッキングヒーター、洗濯機(家族室、夫婦室のみ)、バス、トイレ、ベッド及び家具類が備え付けられている。

おうばく分館は、本学宇治グラウンド構内に位置し、京都南部から宇治にかけての眺望が素晴らしい。また、禅寺で有名な黄檗山万福寺が間近にあり、静寂な環境に恵まれている。

なお、同地には、今後さらに増築を予定している。

人権に関する研修会の開催

6月4日(金)午後3時から、附属図書館(3階)AVホールにおいて、人権に関する研修会が開催された。

本研修会は、学内外から講師を迎えて本学教職員を対象として同和・人権問題の啓蒙を図る目的で、毎年、春秋の2回開催されており、今回は石元清英関西大学社会学部教授を講師に迎えた。

冒頭、渡邊 尚同和・人権問題委員会委員長から「昨年来、本学内で部落差別の落書きが頻発している事態を深刻に受け止め、一人一人があらためて自らを点検し、どのような形の部落差別も許さないという意志を固めることが必要である」との挨拶があった後、石元先生が「被差別部落の現状と今後の課題」というテーマで講演を行った。

この研修会には、教職員約100人が出席し、熱心に聴講した。



部局の動き

教育学部創立50周年記念式典・記念講演・記念パーティー

教育学部は本年5月31日をもって創立50周年を迎えた。これを記念して、教育学研究科では6月5日(金)午後1時30分から、京大会館において学内外からの関係者約100人が出席し記念式典を催した。

式典では、はじめに竹内 洋教育学研究科長が挨拶し、長尾 真総長、興膳 宏文学研究科長、和田修二本学名誉教授及び大西孝雄教育学部同窓会常任委員の祝辞があり、最後に佐藤禎一文部事務次官、佐々木正峰高等教育局長はじめ、多くの方々からの祝電が披露され、午後2時30分終了した。

続いて、午後2時40分より薬学部記念講堂に会場を移し、河合隼雄国際日本文化研究センター所長・本学名誉教授による「個性尊重の教育」と題する記念講演が行われた。この講演には一般市民を含む約300人が参加した。



講演終了後、京大会館において記念パーティーが行われた。同窓生及び関係者約100人が和やかに歓談し、最後に「琵琶湖就航の歌」を一同合唱して散会した。

(大学院教育学研究科)

日誌

1999.5.1 ~ 5.31

- 5月11日 スイス連邦 スイス大使館 Eric MERK 科学技術担当参事官来学，総長及び関係教官と懇談
 " 評議会
- 17日 附属図書館商議会
 " 京都大学春秋講義 月曜講義第1日目
 (以後24日，31日，6月7日，14日開催)
- 19日 アメリカ合衆国 イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 Michael T. AIKEN 学長他1名来学，「学术交流に関する覚書」
- の交換並びに総長及び関係教官と懇談
- 5月19日 国際交流委員会
 " 京都大学春秋講義 水曜講義第1日目
 (以後26日，6月2日，9日，16日開催)
- 24日 学位授与式
- 25日 評議会
 " 将来構想検討委員会
- 26日 防火委員会
- 28日 組換え DNA 実験安全委員会

紹介

大型計算機センターのスーパーコンピュータ

大型計算機センターは，全国の大学，高等専門学校などの研究者が，学術研究に伴う科学技術計算や情報処理を行うための全国共同利用施設である。昭和44年1月の設立以来，レンタル制度の長所を活かして，頻りにリプレースを行い，常に世界最高速のコンピュータを研究者に提供してきた。今回は，この3月にリプレースされたスーパーコンピュータ（スパコン）について，紹介したい。

新スパコンは，Fujitsu VPP800/63という機種である。PEと呼ばれるベクトル型のコンピュータを63台実装した超高速コンピュータで，本センターの名称どおり，性能も大きさもビッグなコンピュータである。幅，奥行きともに1メートル，高さ180センチのキャビネットが26個から構成されるという巨大さである（図1参照）。

しかし，PE1台は，図2の写真に示すとおりで，縦47センチ，横58センチ，高さ13センチという小さいものである。これ1台の性能は，ベクトル演算性能が8 GFLOPS（1秒間に10億回四則演算を行うとき，1 GFLOPS という。）で，さらに通常のコンピュータに備わっているような命令を，毎秒10億回実行することができる。主記憶は，8 GB（総量は，8 GB×63=504GB）という大容量である。前のスパコン VPP500/15の性能は，1台当たり，ベ

クトル演算性能が1.6 GFLOPSで，主記憶が256MB（総量は，256MB×15=3.84GB）であった。VPP800/63の設置床面積は，VPP500/15とはほぼ同じであるから，いかにVPP800/63がコンパクトで高性能であるか，判っていただけるであろう。

PEは，ベクトル型コンピュータであり，自動ベクトル化技術（コンパイラが自動的にベクトル型コンピュータの特徴を発揮させるようにソースプログラムをコンパイルする技術）が十分高度であるため，1台での演算性能は世界一の高速であるといえ



図1

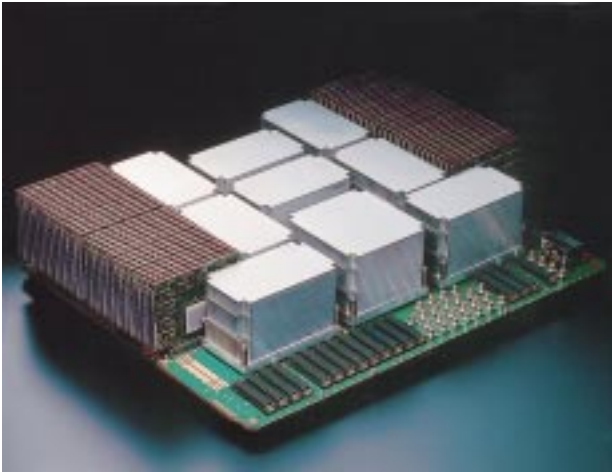


図 2

よう。スパコンの性能評価に用いられる1,000次元の LINPACK では、実効性能は7 GFLOPS を超えている。10,000次元の行列積の計算では、7.83GFLOPS という実効性能を得た。

一方、ある計算を実行させるとき、多数台のコンピュータでいかに分担させて、短時間で計算させるかが問題である。新スパコンでは、各 PE を超高速のクロスネットワークで接続しており、優れた総合演算性能を容易に得られる。十分大きな次元数の LINPACK で、482.5GFLOPS を測定した。理論性能504GFLOPS(8 GFLOPS×63)に対して、95.7% という信じられないほどの性能を実現している。この値は、6月10日現在の世界 TOP500ランキング表に照らし合わせてみると、11位になる。

10位以内のものは、CPU 1 台の性能は低い、800 台以上実装という超並列型コンピュータが殆どである。並列処理では、プログラムの種類によって性能が著しく異なるが、ベクトル型コンピュータでは、比較的、最大に近い性能を引き出し易い。したがって、新スパコンは、種々の研究分野でその能力をいかに発揮してくれるものと大いに期待している。

運用面、使い勝手からは、ジョブ依頼から計算終了までの時間の短縮、40PE まで通常使用できるようになったことが量的な面からあげられる。それよりも、スパコンを会話型利用できるようになったという質的な向上は極めて大きい。作成したプログラムのデバッグを行うのに、会話型がいかに便利かは、プログラムを一度でも作成された利用者なら十分お分かりであろう。さらに、10PE を利用するジョブ

を会話型に実行することも可能である。

プログラミング言語としては、Fortran, C, C++, HPF が用意されている。また、ライブラリとしては、並列処理用として一般的な MPI, PVM が、科学計算用として、SSL II, LAPACK, ScaLAPACK などが用意されている。さらに、アプリケーションプログラムとして、MSC/NASTRAN, POPLAS/FEM 5, Gaussian, MOPAC, AVS, LS-DYNA 3D, FSPICE, MASPHYC が導入されている。これらに対しては、単に導入するだけでは不十分であるので、学内外の専門家、よく利用される研究者に使い勝手を良くするための作業を開発計画としてお願いしている。標準的な利用を念頭においたカスタマイズや、間違いやすい点を指摘した簡単な利用の手引きの作成、テストジョブの作成などをセンターのスタッフとタイアップして始めている。

以上、紹介したように、本センターの新スパコンは世界でも有数の性能を有するもので、利用者の方々の研究を迅速に進めることに、大きく貢献できると考えている。

本センターのホームページの URL は、www.kudpc.kyoto-u.ac.jp である。

(大型計算機センター)

工学研究科附属量子理工学研究実験センター

平成11年4月1日、工学研究科附属量子理工学研究実験センターが発足した。

本センターでは、

- ① 粒子加速器からの量子ビームによって、超高温、超高放射線場、超高エネルギー密度場などの非常に苛酷な環境をナノスケールの微小領域に実現し、これら極端環境下における複合現象の研究
- ② 複合現象を利用した新たな材料の創製や新機能付加につながる物性研究
- ③ アクチニド元素を含む核燃料サイクル技術の構築を目指した基礎研究

などを行う。

これらの研究課題は、基本的にはナノスケールでの素過程に基づいており、高品位量子ビーム技術の活用により解決できるものである。しかしながら、このようなナノスケール領域の極端環境下での極めて複雑な物質現象の解明は新しい学問領域であるため、複数の関連分野からなる協力体制のもと、系統的かつ相補的な教育と研究を行うことによりはじめて可能となる。本センターは、センター長、教授1人、助教授2人、助手1人の専任教員で構成され、国内外の広範な領域から研究者が集まる活性化した複合組織体のコアとなる。

このような複合研究環境のもとで大学院学生等の高度な教育研究を行うことは、次世代の柔軟な思考能力を有する研究者・技術者の育成にとって必要不可欠であることから、工学研究科原子核工学専攻の



協力講座として、量子理工学講座を担当する。さらに、学部教育にも参画し、工学部物理工学科を兼担する。

また、母体となった原子核工学専攻放射線実験室においては加速器施設を多数の研究者・学生に対し、年間延べ4,000時間を超える学内共同利用に供し、教育・研究に多大な貢献を果たした。本センターにおいては、施設・設備をなお一層充実し、学内共同利用を積極的に推し進め、先端的教育研究の進展と新たな学際領域の形成に寄与する一方、学外との協同研究を推進することによって、地域の研究機関や民間企業とも連携をはかり、かつ情報公開につとめ産業活動の支援を行うなど、量子ビーム技術における先導的役割が期待される。

(大学院工学研究科)

文化交流

「オーストラリアの首都はどこ？」

長崎 百伸

1998年9月1日より1999年3月31日までの7カ月間、文部省在外研究員としてオーストラリア国立大学（ANU）のプラズマ研究所（PRL）に滞在し、客員研究員としてプラズマ実験装置 H-1NF にて生成されるトラスプラズマの電子サイクロトロン共鳴加熱と電流駆動に関する研究を行った。PRL と本学エネルギー理工学研究所は1997年に科学研究協力協定を結んで共同研究を進めており、ジャイロトロンと呼ばれる発振源で生成された高パワーマイクロ波のための伝送コンポーネント開発及びプラズマ中の電子サイクロトロン波の伝搬と吸収について研究を行った。

表題にあるような、オーストラリアの首都はどこ？といった質問をされて、「キャンベラ」と答えられる日本人は少ないだろう。毎年観光に50万人以上もの人がオーストラリアを訪れるのにもかかわらず、キャンベラの印象は薄い。キャンベラは、シドニーとメルボルンの両都市がどちらをオーストラリアの首都にするのかもめた結果、両都市の中間に1927年に建設された首都である。首都といっても人口30万の小都市で政治関連の機能だけがあり、車で10分も走れば牧畜のための牧草地が広がる田舎だ。オーストラリア国立大学はこうした緑豊かな自然に囲まれたキャンベラに位置している。住民の多くが政府関連に勤めているため社会環境はやや特殊であり、他の街とは異なった雰囲気がある。オーストラリア人（オージー）はこの街をあまり好んでいないようで、研究室にいるブリスベンから来た Ph.D. の学生に「キャンベラは好きか」と問いかけると、困ったような笑い方をして答えに窮していた。

生活のほうに目を向けると、キャンベラで長期生活をするのにまず必要なものは自動車である。何せちょっと離れたモールに買い物に行こうと思うと、車で時速80kmで10分は走らなければならない。私がキャンベラに着いて最初にしたこと研究ではなく、まず車探しであった。日本のような中古車屋は少なく、個人売買で手に入れることが多い。私の面倒を見てくれた Dr. M. Shats は以前、車の購入で苦労したらしく、その彼からの助言を参考にして、新聞の



プラズマ実験装置の前に立つ筆者

Classifieds やインターネットでの広告、モールにある Car Fair をいろいろと見てまわり、買うまでに3週間かかった。結局、オーストラリア国産の Holden Commodore という排気量 3.8 リットルの中古のワゴンを買ったのだが、値段は安いかわりに保証が無く、実際、私の車もラジエーターの水漏れ、ブレーキの甘さ、ファンの不良動作等の問題が生じ、修理代を結構払った。

オーストラリアで困ったことといえば、意外にも言葉であった。英語圏であるから問題無いと思われるかもしれないが、Aussie English と呼ばれるオーストラリアなまりの英語を理解するのは難しい。エイをアイと発音するため today はトゥダイ、data はダイタとなる。そして、口の中でもごもごとしゃべり、発音がはっきりしない。当初、研究所のミーティングでアメリカから移住してきた所長の英語はわかるのに、年配の技官の英語はまったく聞き取ることができなかった。テレビなどではイギリス、アメリカの映画やドラマが頻りに上映されているのににもかかわらず訛りの強い英語が話されるのは、きつ

と移民一世が人口の22%を占めるこの国で、ネイティブのオージーのアイデンティティーを明確にしたいという気持ちがあるのかもしれない。

オーストラリアは南半球にあるため、日本とは季節が正反対である。キャンベラに着いた9月当初ANU キャンパス内にある桜並木が美しい花を咲か

せているのを楽しみ、12月には蝉の鳴き声を聞きながらクリスマスを祝った。夜空に輝く南十字星を宿舎から見ながら、この国にはまた何度か訪れたいと思った。

(ながさき かずのぶ エネルギー理工学研究所助手)

保健コーナー

「働き盛りの突然死」

つい先ほどまで元気に働いていた人が急に倒れ、そのまま亡くなってしまふ…。突然の死が家族や同僚に与える影響は計り知れない。その好発時期は4月、週末であり、高血圧や心電図の心筋障害所見が重要な危険因子であった。

愛知県内10の企業や自治体で働く従業員約20万人について、1989年から95年までの突然死の発生状況を調査した。突然死の定義は「それまで死に至ることが予想される疾患がなく、症状の発生から24時間以内の、事故や自殺でない死」である。その原因として心筋梗塞や大動脈解離が多いが、働き盛りに特徴的なのはくも膜下出血である。

20万人×7年間で突然死は264件発生した。1万人当たり年間2人である。60代は20代の20倍以上と、高齢者ほど発生率は高い。この264人の突然死のうち251人が男性であった。大手の事業所で働く人たちの男女別の年齢構成が著しく異なるので単純には比較できないが、同じ年齢層で比べると男性の方が発生率が2倍ほど高い。

ふだんの月は20件前後の発生であるが、4月は34件と頭一つ抜き出ている。冬に多く夏に少ないパターンの高齢者とは大きく異なる。4月は何かと状況が変わる時期。働き盛りではどうも自然環境より社会環境の変化の方が影響が大きいようだ。

発生日が特定された240例について曜日別に分類すると、ウィークデーの発生は30件程度であるのに対し、日曜が53件、土曜が39件と週末に多発していた。なお、高齢者では曜日による差はほとんど見られず、この点でも社会生活の関与が示唆される。

働き盛りの突然死ではあるが、通勤を含め仕事での発生は17%の38件にとどまり、仕事以外での発生

が大部分を占める。NHKの調査によれば1年8,760時間のうち2,220時間(25%)働き、330時間(4%)を通勤に費やしているため、勤務中の突然死は意外に少ない。だからといって仕事が無縁ということではない。

さて、突然死をした人にはそれ以前に何か異常があったのだろうか。突然死した人としなかった人のそれまでの定期健康診断の結果を比較した。

血圧が高いほど突然死の確率は高くなり、収縮期血圧(上の値)が160以上になると120未満の人に比べて7倍以上のリスクを背負うことになる。拡張期血圧(下の値)も100を超えると80未満に比べて5倍以上突然死しやすくなる。このほか尿酸値が高いこと、HDL(善玉)コレステロールが低いこと、高度な肥満も突然死の危険因子となる。コレステロールは高いだけでなくむしろ低すぎるのが問題であること、尿蛋白や肝機能といった今まであまり関係があるとは思われていなかった項目の異常も突然死の確率をかなり上げることがわかった。心電図の所見も重要で、特に心筋障害を表わすST-T異常があると4~6倍発症しやすくなる。

検査所見ばかりではない。ヘビースモーカーはリスクが高く、喫煙本数×年数が800を超えると非喫煙者に比べて3倍近い確率となる。一方、飲酒の方は時々飲む程度であれば逆に突然死を半分以下に減らす。もっとも多量飲酒は有害である。

検診結果を活用して健康を管理し、周りの人を悲しませないようにしたい。

(保健管理センター所長 川村 孝)

随想

「現場離れ，自然離れの傾向を憂う」

名誉教授 重永 昌二

科学文明が進み，高度情報化時代に入ってから，職場や生活の中で現場離れ，自然離れの傾向が強くなってきているように思う。現場や自然を客観的に把握し，間接的にこれらを管理するのが文明の体質であるとして，むしろこれらから離れることが，より進んだ社会であるとの考え方が根底にあるのかもしれない。しかし，もともと人間は現場や自然と直接かかわり合うことによって，これらを理解するようになったのであって，そうでなければこのような文明もつくりだせなかった筈である。ボタンを押せば居ながらにして欲しい品物や情報が手に入る生活は便利で有り難いが，そのような生活の中で，現場からの逃避，自然からの遊離の傾向がひどくなって行くのはどうしたものか。やはりもっと現場や自然と直接かかわろうとする考え方も大切にしなければならぬのではないか。

現場離れの雰囲気が増え，現場の実態を知らないオフィス・ワーカーが増え，あるいはオフィスの実状を把握していない管理責任者が増える。企業でも，役所や学校でも傾向は同じで，システム化が進めば進むほど，本来の狙いとは逆にこれがひどくなって行くように見える。農業においても，播種から収穫にいたるまでのあらゆる作業をロボットにやらせ，人間はコンピューターによるリモート・コントロールだけを行おうとする方向に進んできている。農業経営や農作業がいたずらに大規模化されると，人間と自然との肌理の細かいかわり合いが少なくなり，自然の変化に対応する機敏さが失われる。かつての農村特有の自然とマッチした美しさが見られなくなったのも，このような動向によると思われる。

現場離れは自ずから現場軽視をよび，管理システム上の欠陥を招く可能性がある。現に情報化時代といわれながら，以前より間違いの多い，不完全な情報が流されている場合も決して少なくないが，その原因は現場軽視によることが多い。また，人間が必



要と判断して現場に作った構造物を，現場への関心が薄らいで放任した結果，環境汚染や環境破壊をもたらしている例も多い。現場や自然は，いわば動的な，生きた系であり，人間がこれらとのかかわりから遠ざかることは，感性の働きを鈍らせることになるとともに，自ずから適応力を低下させることになる。人類が持続的発展を遂げるための戦略は，自然征服ではなく，自然との共生でなければならないと思う。ところが昨今の現場離れ・自然離れの傾向はこれとは逆の方向に動いているようで，憂慮にたえない。

人間も自然の一部でありながら，人工照明と空調の効いた建物の中での生活を続けていると自然離れが当たり前になってしまう。科学の進歩によって，たしかに情報量は増え，出版物も多くなった。しかし，書物だけからいくら多くの情報を得ても，それは人の知識の借りものにすぎず，直接現場や自然に触れて体験的に会得したものでなければ真にそれを理解したことにはならないであろう。

文明社会とはいえ，われわれはまだまだ多くのことを本当に知っているとはいえない。現場や自然は人間一人ひとりの生活や知識の基盤である。現場離れや自然離れは，感性を鈍化させることによって生活や知識の基礎を脆弱にし，われわれが願う持続的発展の道筋から遠のくことになるのではないか。

(しげなが しょうじ 元農学部教授 平成5年退官，
専門は熱帯農学，植物資源管理学)

公開講座

終了報告

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
公開講座 「テレビの機能と魂の窮境」

今回の講座は、著名なユング派精神分析家である Wolfgang Giegerich 氏の、当センター客員教授としての来日を機に企画された。昨年度までの講座では、不登校・いじめ・非行といった子どもの心理的問題を具体的に取り上げてきたが、今回は、そうした問題の背景にある、今日の子どもが置かれている状況をより広い視野から考えることを目的とした。現代の家庭生活の中で大きな位置を占めるテレビが人間の心のあり方に及ぼす影響について、元型心理学的な視点から検討することがテーマである。

日時： 1999年5月23日（日） 午後2時～5時

第一部 講演「テレビの機能と魂の窮境」

第二部 質疑応答

講師： 臨床教育実践研究センター客員教授 Wolfgang Giegerich
教育学研究科助教授 河合 俊雄

第一部は Giegerich 氏の講演と河合助教授による逐次通訳・コメント、第二部は質疑応答で進められ、心理臨床に関わる専門家や学生を中心に106名が参加した。

講演では、テレビ番組の内容ではなく、テレビを見るということそのものもつ意味が検討された。テレビは我々をかき立て、虜にしてしまうが、現前する実体と関係を持たせることなく、閉じられた自我の情動を強めるだけである。BGM のようにつけっ放しになれば、違う次元が開けてくる可能性をはらむ沈黙を許さない。あらゆるものが露出され、内面性が失われ、外的な表現だけが重要になる。現実とフィクションの違いもなくなり、世界は内容を伴って充実した今ではなく、裸のままの今だけになっていく。この意味で、テレビはプラトンの洞窟の比喻を逆転させ、洞窟の影というフィクションに文字通りの現実性を与えようとしているのである。このように、一般に娯楽と情報のための手段と考えられているテレビは、我々の世界内存在のあり方、つまり魂に働きかけて変容させていく心理学的な機械であることが論じられた。

（大学院教育学研究科）

話題

クラブ紹介 水泳部

水泳部は、1910年（明治43年）に創部され、来年には創部90周年を迎える。

水泳部の中には、クロールや平泳ぎなどの競泳の部と、縦30m、横20mの「水上コート」の中で、1チーム7人が相手ゴールにボールを入れて得点を競う水球の部があり、いずれも多くの輝かしい成績を残してきた。

競泳の団体戦では、関西国公立大学選手権水泳競技大会で、1985年（昭和60年）から1994年（平成6

年）まで10連覇を成し遂げ、個人戦においても、1991年（平成3年）に神田敏克氏が全国国公立大学選手権水泳競技大会の200mバタフライで優勝するなど、国公立大学ではトップクラスにあると自負している。

また、水球でも、関西学生水球リーグ戦で6連覇を成し遂げた歴史をもつなど、関西の大学では常に上位に位置している。

現役時代だけでなく、多くの先輩が今でもマスターズ水泳大会等の試合に参加している。中でも山

元 則氏（昭和9年卒業）は、1995年（平成7年）の水泳マスターズ大会において、85歳～89歳の部の100mバタフライで世界記録を樹立している。

これらの輝かしい歴史を生み出してきた練習場は、創部当初、鴨川の疎水であった。その後、旧教養部（現在の総合人間学部）構内東端にある25mプールを経て、25年前からは、西部構内西側に設置された現在のプールへと移ってきた。

現在のプールは、本学創立70周年記念事業の一つとして1974年（昭和49年）に完成した総合体育館附設プールである。50m 8コースの日本水泳連盟公認プールであり、年に数回、関西学生水泳連盟の公式試合の会場にもなっている。また、1998年（平成10年）には水球ゴールも更新され、施設面は万全である。

現在、私立大学の台頭により、良い成績をあげるには一段と厳しい状況にあるが、この恵まれた環境

の中で日々トレーニングに励むとともに、60名の部員が一丸となって、競泳にも、また水球にも、より高い目標へと挑戦を続けている。

毎年7月～8月に学生・教職員に対し、プールの開放を行っているが、その水難防止等のための監視も水泳部員が行っている。



関西学生水球リーグ戦（本学総合体育館附設プール）

お知らせ

「白馬山の家」の夏季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白馬山の家」を、下記のとおり開設しますので、ご利用ください。

この「山の家」は、中部山岳国立公園白馬山麓^{つがいけ}の梅池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、登山や避暑などに最適です。

なお、建物は山小屋風の木造地上2階地下1階建で、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室からなっています。

記

1. 名称 京都大学白馬山の家
2. 所在地 長野県北安曇郡小谷村大字千国字柳久保乙869の2
(交通機関)
JR 大系線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親の原」下車、徒歩約20分
3. 開設期間 7月10日（土）～8月20日（金）
4. 収容人員 26人
5. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費等実費
6. 申し込み及び利用に関する詳細
体育会事務室（総合体育館内、内線2574）に照会してください。

「白浜海の家」の利用

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白浜海の家」を下記のとおり通年開設していますので、ご利用ください。

この施設は、三段壁をはじめ千畳敷・円月島など風光明媚な南紀白浜にあり、夏は海水浴に最適のところです。

また、「海の家」のある理学研究科附属瀬戸臨海実験所の構内には、500種以上の海の生物を集めた「京大白浜水族館」があり、近くには「南方熊楠記念館」もあります。(いずれも有料)

記

1. 名称 京都大学白浜海の家
2. 所在地 和歌山県西牟婁郡白浜町
京都大学大学院理学研究科附属瀬戸臨海実験所構内

(交通機関)

JR 紀勢本線「白浜駅」下車，明光バス「明光バス本社前」行きに乗車，終点で「臨海」行きバスに乗り換えて，「臨海」で下車。

3. 開設期間 通年開設
4. 室数 和室3室
5. 収容人員 30人
6. 所要経費 1人1泊 使用料130円，ほかに食費等実費
7. 申し込み及び利用に関する詳細
体育会事務室（総合体育館内，内線2574）に照会してください。

「総合体育館附設プール」の夏季利用

「総合体育館附設プール」を下記の期間・時間にかぎり，本学の学生及び教職員向けに開放しますので，ご利用ください。

なお，利用可能日等の詳細については，学生部学生課（総合体育館内，内線2590）に照会してください。

記

1. 期間 7月1日（木）～8月31日（火）（この間の40日程度）
2. 時間 正午から午後2時まで
3. 対象 本学の学生及び教職員

(注意)

1. 利用に際しては，受付で必ず職員証又は学生証を呈示し，利用者名簿に氏名等を記入してください。
2. プールに入る前には，必ずシャワーを利用し，十分な準備体操を行ってください。
また，水泳帽は必ず着用してください
3. 貴重品は，持ち込まないでください。
4. 都合により，利用をお断りする日がありますので，ご了承ください。